

進行性の視覚障害を併せ有する 聴覚障害生徒に対する視覚面の支援

七條 優子* 雷坂 浩之**

1. はじめに

聾学校に在籍する生徒の中には、聴覚障害に視覚障害を併せ有する生徒が数名いる。筑波大学附属聾学校ではその都度、生徒一人一人のニーズに合わせて対応しているが、網膜色素変性症のような進行性の視覚障害のある聴覚障害生徒の場合、聾学校に在籍している間に視覚面の支援をどのように進めていくべきか、悩むことも多い。進行性の視覚障害に関する支援について、支援を導入する時期やその内容について悩み、慎重になる背景には、次のようなことがある。

まず、視覚面の病状の進行には生徒本人の精神面が影響する可能性もあることから、保護者は、本人が現実を冷静に受け止めることの出来る年齢（多くは高等部）になって初めて病名を知らせる場合が多い。そのため、生徒は高等部に入学するまでに聴覚障害については障害の受容がある程度出来ているものの、視覚障害に対しては十分に受容が出来ていない場合がある。視覚面の支援は生徒の心理状態に配慮しながら進めなくてはならない。次に、生徒が聾学校に在籍している間は、生活上さほど見えにくいという困難を感じることなく過ごしていることがあげられる。ロービジョンの面だけで判断すると、まだそれほど切迫した状況にはないため、本校在学中の視覚面の支援は、とりあえず学習環境の整備程度に留めて様子を見ようという結論に至ることが少なくない。

一方で、そのような生徒たちの多くが、聾学校を卒業した後、一般の大学や短期大学に進学していくことを考えると、聾学校の出口である高等部在学中に、生徒が卒業後に自立した生活を送ることが出来るように準備を進めておくことも必要である。

本校高等部では、今回、筑波大学特別支援教育研究センター教諭（以下、センター教諭）の協力を得て、聴覚障害と網膜色素変性症を併せ有する生徒に対し、視覚障害に関する支援を1年2ヶ月間行った。生徒の心理面に配慮して、視覚障害に関する支援を進路指導の一環と位

置づけ、将来の職業や進学先について検討をすすめる過程で必要な指導を進めていった。生徒が自分の視覚障害について知る機会をつくること、そして将来に備えて必要な技術を獲得することをねらいとして行った支援の内容をここに報告する。

2. 事例対象生徒概要

アッシャー症候群（聴覚障害に網膜色素変性症や平衡機能障害を併せ有する症状）の生徒1名（支援を導入する時点では本校高等部普通科2年生）。先天性の聴覚障害があり、幼稚部から中学部まで公立聾学校に在籍し、高等部から本校に入学した。高等部1年の夏休みに、初めて網膜色素変性症について保護者から聞かされ、進行性の視覚障害があることを知った。そのため、自分の視覚障害に関する知識や、将来に備えての技術習得、病状の進行に対する心構えはいずれも十分ではなかった。

右目は重度の視野狭窄で、幼少の頃からほぼ左目のみを使用して生活している。左目にも視野狭窄があるが、日常生活に支障を感じるほどではない。支援開始時に唯一生徒が不便を感じているのは夜盲症のみであった。そのため、視覚障害に関する認識は浅く、将来見えにくい症状が進行していくことについては、「今は考えたくない」と話していた。

3. 支援の実際

高等部1年の夏に病名を知った後、同年冬に定期検査を受けたところ、左目の視野狭窄が少し進んでいることが分かった。病名を知ったことが影響したかどうかは不明だが、生徒の心理面に十分注意しながら様子を見る必要があることを保護者と確認していた。生徒の様子からは、視野狭窄がさらに進んだ時の生活について考えることを不安には感じているものの、とりあえずその問題には向き合わず、考えないことでその場をしのぎようとしていたことが見てとれた。また、眩しさから目を保護する必要があることを知っているにもかかわらず、日差しの強い場所で遮光メガネ（サングラス）をかけようとして

*筑波大学附属聾学校 **筑波大学特別支援教育研究センター

いなかった。

生徒が自分の目の問題に向き合おうとしていないこと、そして眼疾の自己管理の仕方についても改善する必要があることから、視覚障害に関する支援を導入することとした。しかし、進行性の視覚障害と向き合わせる際には、生徒の心理的な負担を高めることのないように、慎重に話をしていきたいと考えていた。

そこで、高等部2年の秋から冬にかけて、生徒と本校卒業後の進路について面談を重ねる中で、卒業後の生活にも目を向けさせ、自立した生活を送るために必要なことを考えさせていった。具体的な支援の内容は以下の通りである。

（１）視機能のアセスメント

高等部2年の冬、生徒と担任、センター教諭による面談を行った。生徒は、視野が狭いことには昔から慣れているため日常生活にほとんど困難は感じないが、夜盲があるため、夕方から夜にかけて外出する際にほとんど見えない状態になって困ると訴えた。それを受け、まずはアセスメントを行うことにした。

遠方視力、近方視力、最大視認力、視野、文字処理能力などについて、センター教諭がアセスメントを行った。その結果、現在の学習環境に関しては、文字サイズを少し大きくする（16p）ことや反転教材を作成・提供することで、生徒の読書効率の向上と目の負担を軽減できることが分かった。しかし、文字処理のスピードが晴眼者の平均と遜色ないこと、そして本人はまだその必要性を感じていないことから、教材の加工については本人がそれを望んだ段階で配慮すればよいと判断した。「拡大読書器」のような視覚補助具も紹介し、有効であることも説明したが、生徒はあまり興味を示さなかった。

生徒自身が夜間に出歩く際に困っていると訴えたことから、まずはロービジョン向けの歩行訓練プログラムを開始し、様子を見ながら徐々に支援内容を修正していくこととした。

（２）夜間歩行のトレーニング

2ヶ月に1回程度、センター教諭が来校して夜間歩行のトレーニングを行った。白杖の持ち方、振り方の指導から始めた。次にアイマスクを装着して白杖を使いながら、校内、校外（学校近辺）を歩くトレーニングを行った。最寄りのコンビニエンスストアまで行く練習をする際には、途中の目印の見つけ方や、壁や塀を利用するガイドラインテクニック（つたい歩き）等の技術を指導した。そして最後に、実際に夜の時間帯にトレーニングを

行い、懐中電灯と白杖を併用して歩行する方法を指導した。

自分の身を守ることが出来るように、自動車が接近している場面を設定し、道路横断のタイミングを判断するトレーニングも行った。自動車の接近を認知する場合、明るい場所では車体の色が距離感に影響することや、暗い場所ではヘッドライトに気付いた時点で立ち止まって待つこと等を指導した。

また、保護者に対しては、夜間に生徒と歩いて移動する際の手引き（誘導法）の仕方を、生徒に対しては手引きのされ方をトレーニングした。具体的には、手引きする側とされる側との基本姿勢を確認したり、道幅が狭くなる時や広くなる時に、情報伝達が的確に行えるようにサインを決めて実践してみる等の内容であった。寄宿舎指導員が参加した際にも、保護者と同様のトレーニングを行った。

（３）心理的なケアについて

夜間歩行のトレーニングを進めていく中で、生徒は少しずつ自分の視覚障害について受け入れられるようになってきた。たとえば、視野狭窄があるために、周りの生徒から呼びかけられていても気付かない場面では、生徒は自分から、見えにくいから気付けないと伝えられるようになる等、変化が見られていた。しかしながら、網膜色素変性症に関しては、身近に同じ症状をもつ人がいなかったため、生徒は自分の将来について具体的なイメージを持つことが出来ずにいた。

そこで、同じ視覚障害がある当事者と会って話をする機会を設定することにした。筑波大学附属盲学校の協力を得て、網膜色素変性症の教員と、視覚と聴覚の重複障害を併せ有する生徒に会うことが出来た。

視野狭窄が進行して見えにくくなっていく際に具体的に困ったことや、そのときに感じた思い、そして将来に備えて準備しておくべきこと等についてのお話を伺うことが出来た。また、視覚と聴覚の重複障害がある生徒と触手話や触指文字で会話をしたり、指点字で会話している様子を見る経験を通して、生徒は様々なコミュニケーション・モードを知ることが出来た。

自分と同じ視覚障害がある人に会って楽しく話をする機会を持つことで、生徒は視野狭窄が現在よりも進行した場合の生活について、より現実的にイメージすることが出来るようになった。それと同時に、見えにくくなっていくことに対する漠然とした不安が少し払拭されて「会えて良かった」と感想を述べていた。

（４）卒業後の生活に関して

高等部３年の秋には進路が決定し、生徒は本校卒業後、一般大学へ進学して一人暮らしをすることになった。大学との入学前相談では、主に聴覚障害に関する情報保障の確認を行ったが、併せて進行性の視覚障害があることも伝え、大学在学中に視覚障害に関する支援も必要となる可能性があることを伝えた。

網膜色素変性症の進行は個人差が大きく、大学在学中に生徒の見えにくさがどの程度進むのか予測するのは不可能である。生徒に必要なのは、今後、自分が必要性を感じた時に、見えにくい症状について大学側に説明をし、必要なサポートを依頼する力である。センター教諭から、盲学校の卒業生が大学に対して依頼している支援や特別措置について紹介し、さらに、困った時に相談ができるように大学近隣の施設や専門家の連絡先等の情報を提供した。

本校卒業後の生活に関しては、今回情報提供することによって終わりにするのではなく、卒業後も必要に応じて、本校教員やセンター教諭が相談にのり、支援していく予定である。

以上が支援の概要である。全体的な支援の流れについては表１にまとめたので、参照されたい。

（なお、支援時の生徒とセンター教諭との会話は、担任が手話による通訳を行った。）

表１ 支援の流れ

日程	支援の内容
H17.12.8	(担任, センター教諭) 生徒の進路(志望学部, 職業)や在学中に必要な支援について相談
H17.12.22	(保護者, 担任, センター教諭) 生徒の進路, 支援の進め方を確認。
H18.1.19	(本人, 担任, センター教諭) 附属盲学校にてアセスメント。
H18.3.1	(本人, 担任, センター教諭) 第１回夜間歩行トレーニング: 白杖の持ち方, 振り方, 歩き方等。アイマスクを装着して校内を歩行。
H18.3.23	(保護者, 担任, センター教諭) 生徒がトレーニングをどう受け止めているか等, 情報交換。 (本人, 保護者, 担任, センター教諭) 第２回夜間歩行トレーニング: 保護者が夜間, 生徒を手引きする方法等

H18.5.22	(本人, 担任, センター教諭) 第３回夜間歩行トレーニング: 最寄りのコンビニエンスストアまで, アイマスクを装着して歩行。ガイドラインテクニック, 手がかりの見つけ方等。
H18.7.7	(本人, 担任, センター教諭, 寄宿舎指導員) 第４回夜間歩行トレーニング: 前回と同じ道を歩行, 技術の定着を確認。寄宿舎指導員が夜間, 生徒を手引きする方法等。
H18.9.1	(本人, 担任, センター教諭) 第５回夜間歩行トレーニング: 環境把握のための自己学習方法等。
H18.10.20	(本人, 担任, センター教諭, 寄宿舎指導員) 第６回夜間歩行トレーニング: 自動車の認知と道路横断のタイミング等。
H18.11.27	(本人, 担任, センター教諭, 寄宿舎指導員) 第７回夜間歩行トレーニング: 18:30から実施。暗い時間帯に実際に歩行。
H18.12.21	(保護者, 担任, センター教諭) 情報保障に関し, 大学と相談する内容, 大学近辺の視覚障害関連の施設の紹介等。
H19.3.12	(本人, 担任, 附属盲学校教員および生徒) 附属盲学校にて, 同じ視覚障害がある方に会って話をする。将来の見通しや, 様々なコミュニケーション・モードについて知る。

４．考察

今回の事例を通して考察したことは二点ある。一点は聾学校における視覚面の支援のあり方について、もう一点は特別支援教育体制下における附属学校間および筑波大学特別支援教育研究センターとの協力の重要性についてである。

生徒はトレーニングを終えての感想を次のように述べている。「自分の目がどの程度まで見えるのか詳しく知ることが出来、さらにその程度に合わせたトレーニング法も教えて頂くことが出来て良かった。また、夜、外を出歩く時に気を付けなければならない事(足元の確認について等)、歩き方(白杖の使い方等)も丁寧に指導して頂き、ものすごく助かった。大学へ行って一人暮らしをする際に、センター教諭からの教えを思い出して気を付けたいと思う。ただ、１年しかやっていないため、もっと指導を受けたかった。白杖の使い方、弱視の人が気を付けることなど、もっと教わりたかった。」

「もっと教わりたかった」という感想に対しては、もっと早くからトレーニングを始めるべきであったという反省の思いと、そのように前向きな気持ちでトレーニング

をとらえていたことが分かり安堵する思いの両方がある。

自分が将来見えにくくなっていくことについて、生徒は当初、「今は考えたくない」と言っていた。そのような感情は十分理解出来るものであり、しっかりと受け止めたい。しかし一方で、視覚障害と聴覚障害を併せ有することを考慮に入れなければ、生徒の進路や将来の職業等について、踏み込んだ話をする事は出来ない。

今回、進路指導の一環として位置づけ、視覚障害に関する支援に取り組んだことは適当であったと考えている。生徒とともに、将来歩む道について話し合い考えを深めていく中で、生徒が自身と向き合うことに時間をかけた。その結果、卒業後に備えて在学中に必要なトレーニングを行う必要があることを理解し、前向きに取り組むことが出来た。聾学校高等部段階でこのような支援を導入する場合、進路指導に絡めて進めていくことの意義は大きいと考えられる。

次に、附属学校間および特別支援教育研究センターとの連携についてだが、今回のような事例の場合、聾学校のみで対応するのではなく、センター教諭や附属盲学校の協力があつたからこそ、より適切な支援を行うことが出来たと実感している。

生徒本人を中心として、保護者、担任、センター教諭が連絡を取り合い、支援の方向性を確認しながら取り組むことが出来たため、生徒や保護者の心理的なケアがよ

り手厚いものになった。

保護者はセンター教諭との面談の中で、次のような話をしていった。生徒が小学生の頃、他の機関で視覚面のアセスメントを受けた際には、ロービジョンの側面だけを見て話をされたので、「これだけ見えていれば問題ない」と言われた。しかし、この子には聴覚障害もあるから、見えないだけでなく、聞こえないということが前提にあるということを分かってもらえなかった。その後も、情報が少なく、いつ何をしてやったらいいか分からなかった。(センター教諭の支援が始まり)視覚と聴覚の両方に障害があるということを踏まえて話が出来て良かった。

また、担任としても、進路指導や必要な支援を検討していく上で視覚障害の専門家からアドバイスを受けられることの効果は大きかった。出来れば生徒が入学した時点から、特別支援教育研究センターと連絡を取り合っておけば、支援の内容をより良いものに出来たのではないかというのが反省点である。

センター教諭と連携してトレーニングを進めることが出来たり、他の附属学校の協力を得て生徒の支援を組み立てて行くことが出来るのは、筑波大学附属学校の強みである。今後も、生徒の実態に合わせて、必要であれば特別支援教育研究センターや他の附属学校と連携して支援に取り組むことを積極的に考えていきたい。